

「望ましい行動マトリクス」の作成による 自立支援及び児童の変容

学籍番号 229104

氏名 小田 哲史

主指導教員 佐々木 靖

副指導教員 木原 俊行

1. 実践研究の背景と目的

本実践研究の目的は、児童の問題行動を減少させ、望ましい行動を増やし、教職員が児童生徒と関わる機会を設けて児童生徒と良好な関係を構築し、教職員に対しても働きやすい学校風土の構築である。

文部科学省の調査では、学校現場における児童生徒の問題行動は、現在の学校教育における課題の一つである。特に小学校は、暴力行為発生率が校種別で最も多く、令和4年度1,000人当たり暴力行為発生件数は9.9件である。実習校に通学している全児童生徒が隣接している児童心理治療施設に入所している子ども達である。隣接している児童心理治療施設に入所している子ども達は、全国の児童心理治療施設に入所している子ども達より極めて対応が困難な児童生徒が入所している。実習校の教職員は、対応が困難な児童生徒対応に追われ疲弊している現状がある。実習校では、計画通り忠実に実行されれば、学校規模で問題行動が減少する(2020, 庭山)と実証されている学校規模ポジティブ行動支援(SWPBS)に取り組んだ。

2. 実践研究Ⅰ：SWPBSの導入に向けて

実践研究Ⅰでは、「SWPBSの土台づくり」を目標に教職員へのアプローチを実施していくことに決めた。土台づくりのために、「教職員へ児童対応の困った感の聞き取り」「望ましい行動マトリクス素案の作成」「生徒指導アプリ(ODR)の運用」を実施した。特に、「教職員へ児童対応の困った感の聞き取り」では、どのような問題行動で困っているか把握することができ、多くの問題行動が挙げられ、教職員が再認識することができた。新しい取り組みに抵抗感を示していた教職員に対してコミュニケーションの機会を増やし、全教職員の合意形成を得た結果、「望ましい行動マトリクスの素案」が完成した。

3. 実践研究Ⅱ：SWPBS の導入・実践

実践研究Ⅱでは、円滑に SWPBS が推進できるように、校務分掌に「SWPBS プロジェクトチーム」を設けることができ、「望ましい行動マトリクスの作成」「SWPBS の取り組み」「生徒指導部会の発足」「SWPBS プロジェクトチームの発足」を実施した。望ましい行動マトリクスの作成は、「望ましい行動マトリクス素案」をもとに、全教職員の意見を取り入れ、「望ましい行動マトリクス」を作成した。同じ目標に向かって実施した研修は全教職員が意欲的に参画し、意思決定の場になった。SWPBS の実践では、全教員と全児童が関わられるように賞賛されるフィードバックシステムを統一したことにより、教員は児童の望ましい行動を見つけようとする姿勢が増え、児童も笑顔で活動に参加し、望ましい行動を行うことが増えてきた。教員と児童の関係性が構築され始めた。データに基づく意思決定の場として「生活指導部会」「SWPBS プロジェクトチーム」を設け、以前まで本当は困っていても、周りの教員に困っていることを話さない学校風土があったが、会議で困っていることを話すことにより全教員で支援方法を考え、実践することができた。

4. 総合考察と今後の課題

今回の報告では、「日本語版 TFI の数値が向上すれば、児童の問題行動が減少し、望ましい行動が増加する」という仮説のもとに SWPBS の導入を目指した。

実習校では、穏やかな SWPBS の土台づくりを経て、第1層支援システムの構築と実践を行った。2年間の実践で日本語版 TFI の数値は 8pt から 15pt となり、実習校に PBS の文化が少しずつではあるが、醸成されている。令和5年度の「児童の問題行動指導件数の1日の平均」は、令和4年度の「児童の問題行動指導件数の1日の平均」と比べて、「0.18件減少」とあまり大きな変化は見られなかったが、児童が笑顔で望ましい行動に取り組む姿、教職員と児童が笑顔で会話しコミュニケーションが増幅する場面、教職員が困ったことを相談し支援できる体制が整ってきたことを踏まえると、実習校の SWPBS の実践は、動き始めた段階であり、SWPBS を発展させ、日本語版 TFI の数値を向上させていく必要がある。

今後、実習校に置いて SWPBS が持続的に発展するため、SWPBS が円滑に運用されるシステムと実践の工夫・改善を繰り返していきたい。また、小学校・中学校ともに、教職員のウェルビーイングの向上と子ども達の明るい将来のために SWPBS を継続し、実習校の学校文化として根付かせていきたい。